

2020 年 3 月 8 日（日）「十字架の呪いの浄め」

マタイ 27:57-66

57 夕方になって、アリマタヤの金持ちでヨセフという人が来た。彼もイエスの弟子になっていた。58 この人はピラトのところに行って、イエスのからだの下げ渡しを願った。そこで、ピラトは、渡すように命じた。59 ヨセフはそれを取り降ろして、きれいな亜麻布に包み、60 岩を掘って造った自分の新しい墓に納めた。墓の入口には大きな石をころがしかけて帰った。

61 そこにはマグダラのマリヤとほかのマリヤとが墓のほうを向いてすわっていた。

62 さて、次の日、すなわち備えの日の翌日、祭司長、パリサイ人たちはピラトのところに来て、63 こう言った。「閣下。あの、人をだます男がまだ生きていたとき、『自分は三日の後によみがえる』と言っていたのを思い出しました。64 ですから、三日目まで墓の番をするように命じてください。そうでないと、弟子たちが来て、彼を盗み出して、『死人の中からよみがえった』と民衆に言うかもしれません。そうすると、この惑わしのほうが、前の場合より、もっとひどいことになります。」65 ピラトは「番兵を出してやるから、行ってできるだけの番をさせるがよい」と彼らに言った。66 そこで、彼らは行って、石に封印をし、番兵が墓の番をした。

【序論】

私たちの人生には稀に、ある瞬間だけ登場し、役割を果たしたら去っていく「不思議な人」との出会いがあります。「あの時に現れた彼は一体何者だったのだろう」という疑問を残しながら、もうほとんど会うチャンスはない…そういう人です。ところが、そのような短時間の関わりが、私たちの人生に大きな影響を及ぼすことがあるのです。私にも、試練のときに手を差し伸べてくれた友人、福音そのものを教えてくださった先輩、進路を決定していくうえで決め手となる助言を下された先生がいます。また、妻を紹介してくださった〇先生は、その役目を終えて間もなく天に召されていきました。関わった時間は短くとも、その一人ひとりが自分の人生にとってかけがえのない存在であることを感じながら、生きてまいりました。

今日の箇所が登場するアリマタヤのヨセフという人物は、主イエスの生涯にとって、まさにそういう存在であったと言えます。聖書の中でも主の埋葬の瞬間しか出てこない。しかも、主イエスと直接交わったことを示す記事すらないのです。それでいて、彼のこの行動には重要な意味がありました。主の復活、主の栄光のために、なくてはならない埋葬だったのです。

【本論】

本論 1. アリマタヤのヨセフについて

夕方になって、アリマタヤの金持ちでヨセフという人が来た。彼もイエスの弟子になっていた。(27:57)

この「ヨセフ」という人物について、分かる範囲での解説をしていきたいと思います。「ヨセフ」という名前を聞いてピンとくるところがあるかもしれません。それは、主イエスの肉の父親と名前が同じだということです。つまり、主イエスの誕生と埋葬の両方に「ヨセフ」という人物が関わっていることになる。しかし、全くの別人です。今回登場するヨセフは「アリマタヤ」という土地の出身であったようです。エルサレムからおよそ 35km 北西にあるエフライムの丘陵地帯の村で、預言者サムエルの出身地でもあります（I サムエル 1:1）。マルコによると、彼はサンヘドリンの「有力な議員であり、みずからも神の国を待ち望んでいた人であった」（15:43）ようです。この説明句はさりげなく書かれていますが、重要な意味をもっています。このたびの十字架裁判の首謀者とは、ほかならぬサンヘドリンなのですから、彼が処刑されたイエスを引き取って埋葬するならば、それは同僚への間接的な非難となる。そして、彼のこの世の地位は危ぶまれること必至でしょう。ルカの情報によると、「この人は議員たちの計画や行動には同意しなかった」（23:51）ようで、裁判が行なわれる時点で既に反意を表していたことが窺われます。おそらく、彼は長年議員を務めてくるなかで、その議会の「汚れ」を問題視するようになったのでしょう。とても神の民とは言えないような宗教的腐敗と形骸化があり、司法行政的営みを根本から蝕み、それが民全体の生活を支配している現実を知ったのです。彼の目から見て、ナザレのイエスの活動は首尾一貫しており、純粹で、汚れなき動機によってなされ、「神の真理」が証しされていた。そして、彼は本当にこの方こそ待望のメシヤなのかもしれないという信仰が芽生えつつあった。しかし、立場上それを簡単には表明することができず、「ユダヤ人を恐れてそのことを隠していた」（ヨハネ 19:38）ようであります。

「夕方になって」ヨセフは行動を開始したようですが、これは金曜日のうちに何としても死体の処理をしなくてはならないという、彼の中の焦りを表しています。主イエスが絶命したのは午後 3 時頃でしたから（マルコ 15:34）、間もなく日が暮れてしまう。つまり、安息日（土曜日）に入ってしまうのです。申命記 21:22-23 によると、木に吊るされた者は日が暮れる前に埋葬しなくてはなりません。安息日は日没とともにやってきますので、そうすると一切の労働ができなくなる。だからそれまでに埋葬を完

了させる必要があったのです。

ユダヤ教の掟によると、死刑に処せられた者は家族の墓に入ることができず、まず罪人用の墓地に送られ、その肉が朽ち果てた後はじめて家族の墓に入ることが許されたそうです。ヨセフはイエスを「正しい人」と認めておりましたので、そのような処遇を何としても避けたかったのです。

本論 2. 丁重な葬り

この人はピラトのところに行って、イエスのからだの下げ渡しを願った。そこで、ピラトは、渡すように命じた。ヨセフはそれを取り降ろして、きれいな亜麻布に包み、岩を掘って造った自分の新しい墓に納めた。墓の入口には大きな石をころがしかけて帰った。(27:58-59)

ローマの慣習では、処刑された人の死体を友人や親戚に引き渡すことは普通でしたから、ヨセフはピラトに直談判するに踏み切りました。彼は主イエスの遺体を「きれいな亜麻布に包み」ましたが、この亜麻布はいつ購入したのでしょうか。十字架死には通常数日かかりますから、その日のうちに主イエスが召されるとは思わなかったかもしれません。つまり、主が絶命されたと同時に大急ぎで町へ行って買い求めたのではないか。そして、「岩を掘って造った自分の新しい墓に納めた」。この墓は将来自分が入るために購入した、まだ使われたことのない（汚れなき）墓でありました。この墓の場所は、現在聖墳墓教会が建っている場所と考えられているようですが、エルサレム近辺に墓を持つことは一般庶民にはまずできないことでした。彼は「金持ち」であった。元々は自分のために買った高価な墓だったはずですが、その墓を主イエスのためにささげたのです（この墓はヨセフの手に戻り、彼自身がやがてそこに葬られ、復活に至ることになる！）。このようにして、「彼は富む者とともに葬られた」（イザヤ 53:9）という預言が成就しました。

さて、このヨセフによる埋葬にはどんな意味があるのでしょうか。主イエスは十字架上で呪われた者となり、「罪人の頭」として死なれました。神の呪いを一身に引き受け、私たちを罪から贖ってくださいました。しかし、この「身に受けた呪い」はそのままであり続けるべきものではありませんでした。主が三日後に復活されることは、すべての呪いから解放され、栄光をお受けになることを意味しますが、このヨセフによる丁重な埋葬は、主イエスの遺体にまわりついていた呪いを除く作業となったのです。ヨセフ自身のうちにそのような意識はなかったかもしれませんが、彼は知らずして主イエスの復活の準備をしていた。

「大きな石」とは、横穴式の墓の入口を完全に塞げるサイズの岩で、ひとたび閉じられたらそう簡単には動かすことのできない重量のものでした。この岩は、主イエスの死

が厳然たる事実であることを象徴しています。私たちが毎週唱えている使徒信条の告白の一つ、「(主は) 死にて葬られ」という一句は、主イエスが確かに一人の人間として死んでくださったこと、私たちと同じ所にまで下り給うたことを証ししています。

本論 3. 敵対者らの行動

さて、次の日、すなわち備えの日の翌日、祭司長、パリサイ人たちはピラトのところに集まって、こう言った。「閣下。あの、人をだます男がまだ生きていたとき、『自分は三日の後によみがえる』と言っていたのを思い出しました。ですから、三日目まで墓の番をするように命じてください。そうでないと、弟子たちが来て、彼を盗み出して、『死人の中からよみがえった』と民衆に言うかもしれません。そうすると、この惑わしのほうが、前の場合より、もっとひどいことになります。」ピラトは「番兵を出してやるから、行っでできるだけ番をさせるがよい」と彼らに言った。そこで、彼らは行っで、石に封印をし、番兵が墓の番をした。(27:62-66)

さて、アリマタヤのヨセフの埋葬という温かな記事で終わりたいところなのですが、主の死を巡って不穏な動きもあったことが記録されています。主イエスに敵対していた「祭司長、パリサイ人たち」が、イエスの死後でさえ、尚もその敵意の手を緩めず、裏工作をしていたという事実です。彼らはイエスがかつて随所で語っていた、三日後の復活の予告を思い出し、それによる民衆への影響を未然に防ごうとしました。復活が実際にはなかったとしても（それは事実起きたのですが）、弟子たちが死体を盗み出して「主は復活した」とふれ回ることを恐れたのです。主イエスに敵する者はどこまでもその道を突き進む。彼らは何と安息日に（「次の日、すなわち備えの日の翌日」という遠回しの表現は「安息日」を表している）、異邦人の許に行っで直談判をしたのです。通常、ユダヤ人は異邦人から汚れを受けたくないという理由により、接近することはなかったのですが、彼らは自分たちの律法を破っででもこのような行動に出ている。しかも、安息日に出歩くということさえしているのです。

アリマタヤのヨセフが主の呪いを除くためにピラトの許に行っでたのに対し、彼らは自らの身に呪いを招くような動機でピラトに謁見^{えっけん}している。この二者の鋭いコントラストがここに描かれております。主の復活をめぐる分裂と言ってもいいでしょう。皮肉なことに、彼らのこの行動もまた、主の復活を暗示しているのです。ヨセフによる埋葬は主の復活を正の側面から証しし、敵対者たちの行動は負の側面から証ししていた。

ピラトが派遣したという番兵が、ローマの軍人を指すのかどうかは定かではありませんが、結果としてこの人々が主イエスの復活の目撃証人になってしまうのは皮肉です。

【結論】

今日は、主イエスの埋葬が既に復活とのつながりを持ち始めている事実を確認しました。アリマタヤのヨセフという一人の議員の勇気ある行動によって、主の遺体にまつりついた呪いが除かれていったのです。そして、このことは実にヨセフ自身がやがて主の復活と一つになる備えでもあった。一方、ヨセフとは対極の行動を取った人々の不信仰が際立つ記事でもありました。読者にも一つの問いかけがなされているでしょう。どのような態度で主の死と向き合うか。また、復活の主と相見えるか。来るべき日^{きた}に向けてどのように備えていくか。これから一ヶ月の期間を経てイースターを迎えますが（4月12日）、私たちも主の死、主の復活と一つにされたいと思います。

【祈り】

私たちが受けるべき罪の呪いを一身に引き受けてくださったイエス様。その呪いは如何に重くあなたの全存在を傷つけたことでしょうか。栄光の神の子が十字架上で汚されたのです。この呪いは確実に取り除かれなくてはなりません。その一役を担ったアリマタヤのヨセフの幸いを覚えます。その丁重な埋葬は、主の復活の備えとなりました。私たちも彼と同じ心で主イエスに関わりたく願います。いえ、主イエスが私たちを愛し関わってくださったからこそ、それにお応えしたいのです。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
アリマタヤのヨセフを派遣し、十字架の呪いを地より除き給うた、父なる神の愛、
人類の死と一つになり、復活の初穂となり給うた、主イエス・キリストの恵み、
主と共に死に、主と共に甦る人生を、終りまで歩み抜かせ給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。